

ソーシャル言語学の対象 「言語」の再検討

—ルイ＝ジャン・カルヴェの批判から—

高木敬生 博士課程後期 3年

0. 序

ルイ=ジャン・カルヴェ Louis-Jean Calvet はフェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure 『一般言語学講義』 *Cours de linguistique générale*¹⁾ のトゥリオ・デ・マウロ Tullio de Mauro による校訂をフランス語に翻訳し、また *Pour et contre Saussure* (1975) を著すなど、ソシュール研究に業績を持つ。しかし、彼の研究の中心はむしろ社会言語学の分野にあるだろう。彼は言語政策と植民地主義の関係など、言語学が社会に与える影響を分析し、そこに隠れているイデオロギーを批判する。

本稿の目的は、カルヴェがなしている社会言語学的な立場からの言語学批判を検討し、特にソシュール以降の言語学が前提としている言語観とカルヴェのそれとの間にどのような齟齬があるのかを明らかにすることである。

議論は次の順序で行う。まずソシュールから現代言語学にまで継承されている研究対象「言語 *la langue*」について論じる。この言語という概念に、ソシュールは社会的という性質を割り当てているのであるが、それをカルヴェの社会言語学的立場から検討するとどのような問題が示されるのかを考察する。まさにこの点にソシュールとカルヴェの言語観の違いも見いだされるだろう。次に、ソシュール言語学は共時的言語体系を研究対象とするのだが、その言語観念は実践的な社会言語学的視点からすると大きな問題をはらんでいるという。カルヴェはこの問題に関して、言語に代わる「言語共同体」という概念の重要性を説くのであるが、その指摘はそれまでの言語学に欠けていたものを明らかにするという意味で重要であろう。結論では、しかしながら、それが即座にソシュールの方法論をナンセンスにするのではなく、むしろ両者が相補的に研究を進展させることで、言語研究全体に貢献することになると指摘できるのではないだろうかと考える。

1. 「社会的」とは何か？

カルヴェは過去の言語学、つまりソシュール以前の言語学から、ソシュール以後の言語学へと継承されているある問題を批判している。すなわち彼は、ソシュール以前の言語研究においては、時代ごとの社会的傾向やイデオロギーなどによって、無意識であるにせよそうでないにせよ、その言語観を歪められていたと指摘する。そうした言語研究は最終的にヨーロッパ中心主義というイデオロギーとあいまって、植民地主義の正当化に役買うことになったという。つまり、カルヴェによれば、研究者が抱く言語観は、彼が属する社会を支配するイデオロギーにより歪んでしまうのである。彼はこうした意味で言語を「社会的」と形容する。このカルヴェの「社会的」という語の使い方は、ソシュールの同時代人、アントワヌ・メイエ Antoine Meillet が言語を社会的事実と呼ぶ際の概念に大きく影響を受けている。片や、ソシュールも言語の性質として「社会的」という形容詞を用いる。しかし、彼の用法はカルヴェがいう意味での「社会的」とは異なるのである。ここにソシュールとメイエ（およびカルヴェ）との相違点を指摘できるのである。それはどういうことか。

まず、カルヴェがフランスにおける言語研究史をどのように見ているのかを確認しよう。カルヴェは、人が言語をみる際に、中立的立場から純粹に言語だけを見ることは困難であり、また不可能でもあるという事を証明しようとする。かれは『言語学と植民地主義』において、言語には常にイデオロギーの影響があることをプラトンの時代にまで遡る事実であるとし、16世紀から近代言語学が生まれる19世紀までの、つまりソシュール（あるいはメイエ）に至るヨーロッパの言語研究におけるイデオロギーの影響をまとめている。以下に要約する。

それによれば、16世紀は神学的見地から、古代文学の言語であるラテン語・ギリシア語・ヘブライ語が高貴な言語・聖なる言語として優位にたち、それ以外は俗語とされる。結果、言語研究は、自らの言語を権威付けるために原初の言語（主にヘブライ語）との系譜を立証しようとする動きになるのである。ここに当時優勢であったハプスブルク家とのヴァロワ家

の政治的対立（つまりイデオロギー）が関わり、ゲルマン語に対する優位を示すためロマンス語を正統なものとみなそうという動きが活発化する。つまり社会の要請に合わせて、本来中立であるべき科学的見地が保てていないのである。言いかえればナショナリズムが言語に対する見方を歪めたといえる。

17世紀にもその傾向は継承され、かつ先鋭化していく。それはまず、フランス語の純化というかたちであられる。たとえばフランソワ・ド・マレルブ François de Malherbe は外国語だけでなくフランス本土内の諸言語の影響すらも排除しようとした。また、この時代にはアカデミー・フランセーズ Académie Française が創設（1635年）され、フランス語の権威付けが一層推し進められていく。たとえば、クロード・ファヴル・ド・ヴォージュラ Claude Favre de Vaugela は「良き慣用 bon usage」と「悪しき慣用 mauvais usage」を区別するのだが「良き慣用」とは、彼の著作²⁾の序論によれば、つまり宮廷のことばなのであって民衆のことばではない³⁾。マレルブ、アカデミー・フランセーズ、ヴォージュラの一連の流れは（そこに対立関係があったにせよ）言語的中央集権化という意味では同じ潮流に属するといえるのである。この時代にはデカルト⁴⁾の思想から合理主義が生まれる。さらに言語がどれだけ理性に適しているかに基づいてフランス語がそれに最もかなった言語とされ諸言語の中での優越性を保証されるにいたる。ポール・ロワイヤルの修道士による『一般理性文法』⁵⁾がその具体例である。

18世紀になると、言語研究は啓蒙主義の思想的影響、それも非常に大きな影響を受ける。当時も、前世紀以来の言語観、つまり通時的に見て、それ以前の言語と現行の言語を比較した際に現在の言語がより完成しているとする言語観は継承されていた。この観点からフランス語が最も完成した言語とされていたのである。それに加えて、この時代は言語の起源、その原型に対して関心が高まった。結果、彼らはヨーロッパの国々に比べたとき文化的に未開である社会は使用する言語も未開であると結論する。つまり進化の順序を考えると、未開社会の卑語（ジャルゴン jargon）のほうがヨーロッパ諸言語よりも起源に近いのであるから、言語の原型を求める

には、それらの言語を調べればよいということになる。この考え方が意味するのは、通時的な言語の進化論的仮説が、共時的世界における文明／未開というヨーロッパ中心主義的構造に回収されたという事である。こうして、人種主義と植民地化が正当化されるのである。相手（植民地）がすでに死に体（悲惨な状態）であるときに、これと比較して自分の価値を主張するような啓蒙思想をジャン・ビウ Jean Biou は「人喰い」と表現する。カルヴェはそれを踏まえて、言語におけるそうした状況－自己の言語の優越性を根拠付けるために他の言語（及び文化・社会）を自分たちの価値基準のうちで低く位置づけるやり方を「ことば喰い」と呼ぶのである。しかし、18世紀においては、文明社会と未開社会とを、歴史的段階の進展に差があるだけで、本質的な優劣としては見ていない。

こうして現代言語学の父たるソシュールがその思想を養う19世紀に入るのであるが、この世紀は前世紀のように全世界の言語がそこから発した唯一の起原などは求めない。その結果、非ヨーロッパに対する人種的偏見に起因する偏見が言語観にも侵入する余地が生まれたのであった。未開人はそもそもヨーロッパの人間とは根本が異なるもの、いわば非-人間とみなされるようになるのである。カルヴェはそこに、言語研究が進化論的な見方を裏付けるものとして利用されたことを指摘する。ここにヨーロッパ中心主義が世界全体に対するヨーロッパの優位という形で顕在化しているのである。というのも、言語類型論においては屈折言語がもっとも発達した言語でありそれは“偶然にも”印欧語の特徴的な類型なのである。カルヴェは以下のように説明する。

十六世紀には、言語的対立はヨーロッパのナショナリズム間の衝突に根ざしていた。しかし、十七世紀と十八世紀に穏やかに進行した世界の発見を経て、いまや[十九世紀は]、地球上の他の地域に対して西欧を防衛することこそが至上命令である。もはや問題は、フランス語のドイツ語に対する優越性を証明することでも、その逆でもなく、インド・ヨーロッパ諸語のそれ以外の言語に対する優越性を証明することなのである。⁶⁾

ヨーロッパの諸言語の印欧語としての同族性が「人種の一体性と同一視され」、植民地主義に一役買っていたのである。このようにして、カルヴェは言語学が各時代のイデオロギーとは切り離せないものであると証明する。これはつまり、研究対象である言語は、ソシュールが言うようにわれわれがそれ自体として客観的立場でみているつもりであっても、カルヴェがいう意味での「社会的な」傾向を抜きにしては語れないということの証明である。

こうした立場から、カルヴェはソシュールがラング概念を「社会的」と呼ぶことについて以下のように述べている。

そこには、言語は「言語活動の社会的部分である」とか、「言語は一つの社会制度である」といった断言が散見される。にもかかわらず、この書物[『一般言語学講義』]がことさら強調するのは、「言語はその固有の秩序しか知らぬ体系である」ということや、その最後の一文で主張されているように、「言語学の独自・真正の対象はそれじたいとしての・それじたいのための言語である」ということなのである。ソシュールはこのように、どうやら正当だと思っていた「それじたいとしての言語」と、それ以外のものとの間に、明確な境界線を引いていた。⁷⁾

ソシュール言語学において対象を純粋な言語のみとするこの限定は、「社会制度」と規定しているにもかかわらず、その射程からカルヴェがいう意味での社会的要素を捨象している。さらにこの点はソシュールの理論を直接的に利用しているルイ・イエルクスレウ Louis Hjelmslev のような論者だけでなく、レナード・ブルームフィールド Leonard Bloomfield らアメリカ構造言語学者やノーム・チョムスキー Noam Chomsky にまで継承されているとカルヴェは指摘するのだ。カルヴェの意味する社会とは話す人々がなすものであり、デュルケーム的な意味での「社会的事実」とはそうした人々のある種の傾向であって、それは個人を超えた集合意識を意味する。

しかしソシュールは言語を社会的なものと規定しながら、なんら社会からの影響がない中立的な視点で言語を対象化しようとしているのである。カルヴェはこの点に異議を唱える。

諸々の言語は、それを話す人々なくして存在しない。一つの言語の歴史とは、その話し手の歴史である。しかるに言語学における構造主義は、言語に内在する社会的なものを頑として考慮に入れないことによって構築されてきた。⁸⁾

ここから明らかになる重要なことは、構造言語学理論の対象とする言語の社会的性質と、カルヴェの考える社会言語学の研究対象の意味する社会的性質とは異なるものだということである。彼はソシュール以降の言語学者の多くが前者の意味で対象に社会的性質を認めているなかで、メイエの理論には違う傾向が見られることを指摘し、構造言語学と社会言語学との言語の社会的概念形成の対立の起源をソシュールとメイエとの考え方の違いになぞらえて説明するのである。

メイエは、カルヴェが「言語の社会的性格を強調してきた」と指摘するように、確かに言葉に対する社会の関わり方を重要視している。

言葉は第一の条件として人間社会の存在があり、社会の側からすれば言葉は不可欠で絶えず使用されるものである。歴史的偶発事は別として、様々な言語の境界は国民と名付けられた社会的集団の境界と一致する傾向がある。また、言語統一の欠如はベルギーのような真新しい国家やオーストリアのような人為的に構成された国家のしるしである。したがって言葉は何にもまして社会的事実 [fait social] なのである。実際、言葉はデュルケームが提示した定義にまさしく含まれるのだ。⁹⁾

このメイエの言葉に従えば、言語が社会的事実であるということは、その人間社会の集合意識のあらわれであるとされると理解できる。そうした集

合意識を持つがゆえに国民などの社会集団の範囲と言語範囲が重なるのである。カルヴェは上記引用箇所を3つに分け、メイエのいう「社会的事実」の定義としている。ソシユールにおけるエミール・デュルケームの *Die Religion im Sozialismus* の影響は丸山圭三郎が著書『ソシユールの思想』などで指摘するところではあるが、カルヴェの観点からすればむしろメイエのほうがはっきりとデュルケームの社会学、そして「社会的事実」という概念の影響を受けているのである。

対してソシユールにとって「社会的」とはどのような意味か。ソシユールが言語を社会的と呼ぶのは、第一に社会的産物 *produit social* という意味からきていると読み取れる。それは言語が社会的制度 *institution sociale* であるということと同義である。つまり、言語が個人で成立させ得るものではなく、ある集団の中で各成員が共通して初めて成り立つ制度であるという程度の意味である¹⁰⁾。誤解を恐れずに単純化すれば、ソシユールの「社会的」という用語はただ単にそれを成立させる条件としての集団的使用を示唆するものに過ぎないのであって、その集団がどのような共同体であるか、どういった歴史をもってきたか、といったことには無関心なのだとも言える。それゆえにソシユールは人間社会という集団以前に言語を設定し、その言語を用いる集団を言語共同体と呼ぶのである。対してメイエは、言語にはある傾向を持った社会の集合意識の影響があると考えているようである。ここにソシユールとメイエ（そしてカルヴェ）の「社会的」という用語と言語に対する社会の関係のとらえ方の決定的な差異があるといえるだろう。

2. 共同体の問題（共時的言語共同体か、社会的共同体か）

カルヴェは言語を社会的事実として強調している。それは『社会言語学』の結びからもあきらかである。彼は言語学という大きな枠組みの中に社会言語学という分野を位置づけようと試みの失敗を、構造言語学や生成文法のように、内的言語学に偏向した言語学との関連の中で定義しようとしたことにあると断じ、「言語が社会的事実（あるいは産物）であるという、

かなり広く受容されている主張を真剣に受け取るならば、言語学は、言語の観点に立った社会共同体の研究として定義されるほかない¹¹⁾と述べている。彼に従えば、社会言語学によってはじめて言語研究ができるのであり、その研究の一部が言語の内的研究であるところのいわゆる言語学なのである。したがって、社会言語学は括弧付きの（社会）言語学 (socio)linguistique とされるのであるが、その理由をもう少し具体的にみていこう。

ソシール言語学の言語概念における「社会的」という性質はカルヴェがいう意味での「社会的」という性質とは異なることは先にみたが、それに加えて、彼の指摘には重要なことがある。カルヴェは、ソシール言語学（及びそれ以降の言語学）にとっての、かなり重要だが曖昧なままにされてきた問題、“なにが言語であるのか”、“どこまでが同一言語であるのか”という諸言語の単位の問題をも示唆しているのである。これは、彼が正しければ、社会言語学がソシール以来暗黙の内に設定されてきた言語という抽象的な存在体に対して、現実における具体的な姿を与えることができるということである。

一言語 *une langue*、それは国語なのか。方言や俚言などはどうであるか。そもそも、メイエはいうまでもなく、ソシールやアンドレ・マルティネ André Martinet ら構造言語学者も個々人の間で言語は完全に一致しないことを認めていたのではなかっただろうか。だが、そうして個人で言語が異なるとした場合、それでもなお言語をソシールの意味で「社会的」と呼ぶことができるのか。ソシールは社会的な行為が集団の中にしか存在しないものであって、個人を通さねば把握できないとしながらも社会的な事柄は、ある平均的なもので、個人だけでは完成されないと述べている。

社会的な行為はそれぞれ混ざり合った個々人においてしか存在しないが、全く別の社会的事実と同様に、個人の外では考察され得ない。社会的事実、それはどのような個人においても確立されることはなく、おそらく完成することもない、ある平均値であろう。¹²⁾

この言葉からもソシュールの考える「社会的」とは同一言語を用いる個人の集まり、つまり言語共同体における使用を示唆していると思われる。だが、「それはどのような個人においても確立されることはなく、おそらく完成することもない」という言葉からすると、ソシュールは社会的事実を考察しえないといっているようである。しかし、その共同体の成員の中で「平均値」を出し、その集団には誰が含まれて、誰が含まれないということ、つまり母集団を確定しなければ言語を用いる共同体も確定されないのではないか。このような問題からも言語単位には基準が不在であることは明らかだ。このままでは、言語という用語は対象の確定されない観念でしかなくなってしまうのではないか。

これに対し、社会言語学の重要な関心事のひとつが、そうした母集団の設定、つまり一言語という単位を提示することだと言えよう。研究対象として、それ自体としての言語という抽象化を行い、それを研究することで言語についての一般法則が規定可能であるように考えることへ向けた疑問は、メイエに由来するものである。メイエは『一般言語学講義』の書評で、最初の2つの部（第一部「一般原理」と第二部「共時言語学」）は、そこには言語学にとっての研究材料を見出せるがゆえに、すべての言語学者が注意深く読むべきだと評価しながら¹³⁾、『講義』の中の用語の問題について次のような批判を加えているのである。

フェルディナン・ド・ソシュールは、言語変化が依拠する外的条件と言語を切り離すことによって、現実から言語変化を取り除いている。つまり彼は、言語変化を、必然的に説明できない抽象へと簡約している。¹⁴⁾

これはいわば、共時的体系としての言語という対象を選ぶことで通時的変化という現象を軽視することになってしまう可能性に対するメイエの警告である（もちろんソシュールが実際にそのように言語変化を取り除いていたかは別であるが）。共時態／通時態および内的言語学／外的言語学を区別したソシュールに対しメイエはそれぞれの両者を収束させようとした、

とカルヴェは考える。その点でソシユールとメイエは見解を異にすると指摘するのである。そうしてメイエにおいて社会言語学の萌芽を見出すのだが、これは、ソシユールが言語という概念から、外的な要因や通時的要因を取り除いたことに起因するだろう。カルヴェは、ソシユール的な外的な要因や通時的要因を取り除いた純粹概念としての言語ではなく、歴史を持ちかつ内部に対する外部の存在を無視できない言語共同体を研究対象として取り上げることを推奨するのだ。

言語学の研究対象は、一つの言語ないし複数の言語であるにとどまらず、言語の観点から見た社会共同体にまで及ぶ¹⁵⁾

もちろん言語共同体というソシユール以後社会言語学によって提案されてきた概念は、先に見たソシユールのように、違う用語のもと、構造言語学者らによって使用されてはきたのである。しかし、その用法は結局のところ「言語を同じくする共同体」であって、極論すれば言語がまとめる共同体なのである。この言語共同体を言語学者が定義しようとするのは結局（個別）言語を定義しようとしているに他ならない。言語共同体を言語単位の基準とみなすと、ある言語共同体の定義で「ある言語共同体は言語 A を用いる共同体である」という定義がされるにも関わらず、その言語を定義する際には「言語 A とは言語 A を用いる共同体で用いられている言語である」というトートロジーに陥る危険があるのである。

カルヴェは、一旦言語学者の視点に立って、より具体的に言語を基準とした共同体設定の問題点を指摘する。彼はまず、言語共同体設定の問題を克服するために3つの解決策（言語共同体の定義）を提示する。まず「同一の第一言語を有する人からなる共同体 (1)」という仮定である。これはウィリアム・ラボフ William Labov の研究する英語話者などが対応するが、そうした場合、ニューヨークやパリなど、第一言語ではないがその言語を使用できる外国人は排除されてしまう。また「同一言語によって互いに理解し合える人々からなる共同体 (2)」ということも考えることができ、ブルームフィールドやマルティネがそうした立場といえる。これは個人が少

しでも当該の言語を使用できればその共同体に所属するといえることになる。こうして、複数の共同体に個人が属し得る可能性を考えた場合（たとえばチャールズ・ファーガソン Charles Ferguson の指摘するダイグロシア社会など）を考えると「当該の共同体に属しているか、そう欲している人々によって構成される共同体 (3)」という個人が自発的に所属する共同体を選び得る可能性もあるだろう。

結局のところ、これら3つのどの解決策もすべて言語に対する個人の主観によって多様化し得る解法である。また、分析対象が個人になるという理由で言語を社会的事実として分析しているとは言い難い。しかもどの解法を選ぶかによって答えも異なるのだ。こうした考察のもとで、カルヴェは「言語から離れて、社会的現実から出発すること¹⁶⁾」を提唱しているのである。つまり、東京の中国語話者であっても韓国語話者であっても、現実に東京のコミュニティーに属しているのである。こうした考察から導き出されたのが、「言語が社会的事実（あるいは産物）であるという、かなり広く受容されている主張を真剣に受け取るならば、言語学は、言語の観点に立った社会共同体の研究として定義されるほかない¹⁷⁾」という言葉なのである。

3. 結論

以上のように、ソーシャル言語学の問題点をカルヴェの視点から論じてきた。

それは、次の2点である。

I. ソシユール言語学において言語は「社会的」であるとされる。しかし、その概念をデュルケームのいう社会的事実になぞらえて考察したメイエの立場に比較すると、集団性が含意されているとはいえ純粋に社会学的な意味とはいえなかった。これは、ソーシャルが言語という研究対象を他のあらゆる要素から切り離して純粋にそれ自体を扱おうとする姿勢に由来する。とはいえ、カルヴェの考察が示すように純粋に中立的立場から言語をみることなどできないのであって、言語は社会との関連の中でその姿も

変化する。両者の言語に対する姿勢は相入れないものとなっている。

Ⅱ. ソシュール以降の言語学では、言語という対象があることを暗黙裡に認めているが、その言語は実際の世界においてはどのように区別されるのかという問いがたてられる。諸言語の区別をある一定の共同体で用いられている言語であるとし、その成員は皆共通の言語を話すものだとすることのトートロジーはすでに確認した。ここでカルヴェは言語の単位設定の基準がそもそももっと正確に定義されねばならない問題だと示唆しているのである。それだけでなく彼は、言語という単位を設定する前に社会共同体を明確にすることを指摘している。そうして社会共同体との関連の中で言語の同一性や差異を設定することを主張するのである。

最後に、カルヴェの批判に対するソシュールの立場からの反論を考えてみよう。このことから、カルヴェの指摘は確かに言語学者ですら陥るイデオロギーの罠に気付かせるものであると確認できるであろう。

たとえば、「確かに過去の言語学は言語を有機体とみなす観点や、進化的な観点から、人間の優劣の基準として用いられる傾向があった。だが、現代言語学はそうした見方をすでに批判し、克服しているはずである。それゆえ、ソシュール以降の言語学は社会的な観点にそれほどこだわる必要はなく、むしろ対象をしっかり把握するためには言語以外の現象を捨象するというソシュールの考え方は正しいのではないか」と反論できるかもしれない。しかしながら、たとえばマルティネは「言語社会」という「十分に規定され」、「その成員たちはあらゆる点で同じような話し方をする」ような対象をたてること、つまり「各言語の完全な均一性」を条件としてしまうことをカルヴェと同様に問題視している¹⁸⁾。

1. どんな社会でも、言語の上でまったく等質ということはない。つまり、どの一人として、ほかの誰かとまったく同じ言語の使い方をする人はいないし、同じ場面が、異なる傍観者から言語上の異なる反応を引き出す、ということもある。また、どの一人として、ほかの誰かとまったく同じ語彙を使ったり、理解したりするわけではない。¹⁹⁾

しかし、こうした指摘をしているにも関わらず、マルティネは言語と方言との格差付けを意識から排除できていないのである²⁰⁾。彼は言語とは大小の変異体、つまり方言の集まりだと考え、それら変異体を使用しての意思疎通可能な射程の広さに応じて方言₁と方言₂と区別する。前者のほうが後者よりもその射程は広く、言い換えれば広い範囲にわたり使用されている。

言語というものは、ある言語社会の時代遅れな田園地帯で貧困な伝達手段として生き残っているだけの多くの方言₂には、けっして与えられない資格をもつもの、と解釈されている。方言₂を含む状況の場合に、誰もが二言語使用状態と言うのをいやがるのは、それによって、方言₂にふさわしくない資格を与えるという印象をもつことが、まさにその原因である。²¹⁾

この部分は一般論について語っているようだが、結局その「一般論」こそが方言より言語が上位に位置づけられるという先入観に影響を受けた見方であって、それに従うということは、それを甘受するに等しい。

この例から、言語学者さえ彼の所属する社会からの影響を免れることは困難であることが指摘できるだろう。

だが、一方で、それ言語それ自体という純粋な対象を設定するソシユール的方法論は、必ずしもカルヴェのように社会共同体の設定を優先する研究に劣るものではないのではないだろうか。確かに実践的な面で考えれば、言語を対象として設定するにはまず社会共同体の設定が必要であることは説得力がある。しかし、それはあくまでも社会言語学の観点から見た場合であって、構造言語学はそれとは異なるスタンスにあるのだから、研究方法もそれに応じて異なるのは当然ではないだろうか。カルヴェは社会言語学にソシユール以降の言語学を包括するような地位を与えようとするが、両者はそうした関係にあるのではないように思われる。共同体を言語の観点から研究するということは、つまり我々が言語について何らかの知識を持っているということになる。ということは、言語のみを一観念的ではあ

っても一研究することも共同体研究に劣らず重要である。結局、カルヴェとソシュールの違いというのは言語という対象へのアプローチの仕方であって、一方は帰納的なアプローチであり他方が演繹的なアプローチであることに過ぎないのではないだろうか。どちらかを優先するよりも相互に補完し合いながら言語学は成り立つと考えられるのである。

注

- 1) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*(1995), publié par Charles Bailly et Albert Séchehayé avec la collaboration de Albert Riedlinger, Ed. critique préparée par Tullio de Mauro, postface de Louis-Jean Calvet
- 2) Claude Favre de Vaugela, *Remarques sur la langue françoise[sic] utile à ceux qui veulent bien parler et bien écrire[sic]* (1647)
- 3) cf. Claude Favre de Vaugela, *op.cit.*, « Preface », 序文にはページがふられていない。タイトルの書かれたページを p.1 と見て p.3 を参照。
- 4) René Descartes (1595-1650).『方法序説』 *Le Discours de la Méthode* (1637) はラテン語ではなくフランス語で書かれた。
- 5) Antoine Arnauld et Claude Lancelot, *Grammaire générale et raisonnée, contenant les fondement de l'art de parler, expliqués d'une manière claire & naturelle; les raisons de ce qui est commun à toutes les Langues, & des principales différences qui s'y rencontrent; et plusieurs remarques nouvelles sur la Langue Française.* (1754)
- 6) ルイ＝ジャン・カルヴェ著、砂野幸稔訳『言語学と植民地主義 ことば喰い小論』(2006)、p.46
- 7) ルイ＝ジャン・カルヴェ著、萩尾生訳、『社会言語学』(2002)、p.7
- 8) *ibid.*, p.8
- 9) Antoine Meillet, *Linguistique historique et linguistique générale*(1982),
- 10) cf. Ferdinand de Saussure, *Troisième cours de linguistique générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin: Saussure's third course of lectures on general linguistics (1910-1911) from the notebooks of Emile Constantin* (1993), French text edited by Eisuke Komatsu / English translation by Roy Harris, pp.13-14
- 11) ルイ＝ジャン・カルヴェ著、萩尾生訳、『社会言語学』(2002)、p.175
- 12) Ferdinand de Saussure, *op.cit.*, p.69
- 13) Antoine Meillet, «Comptes Rendus(Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*) », *Bulletin de la Société de Linguistique*, no.64(1915-16), La Société de Linguistique de Paris, p.34
- 14) *ibid.* p.35。カルヴェの『社会言語学』においては p.166 とされているが、

- フランス国立図書館 (bnf) の gallica で参照できる紀要のページに改めた。
- 15) ルイ＝ジャン・カルヴェ著、萩尾生訳、『社会言語学』(2002)、p.132
 - 16) *ibid.* p.130
 - 17) *ibid.* p.175
 - 18) cf. アンドレ・マルティネ著、田中春美・倉又浩一共訳、『言語機能論』
p.114
 - 19) マルティネ、*op.cit.* p.118
 - 20) ルイ＝ジャン・カルヴェ著、砂野幸稔訳『言語学と植民地主義 ことば
喰い小論』(2006)、p.59。ここでカルヴェはマルティネが方言₂に対して言
語という呼称を与えないのは方言₁が高貴な言語で方言₂を後れた言語とみ
る典型だとする。
 - 21) マルティネ、*op.cit.* p.124